

国内の畜産物の需給動向

牛肉

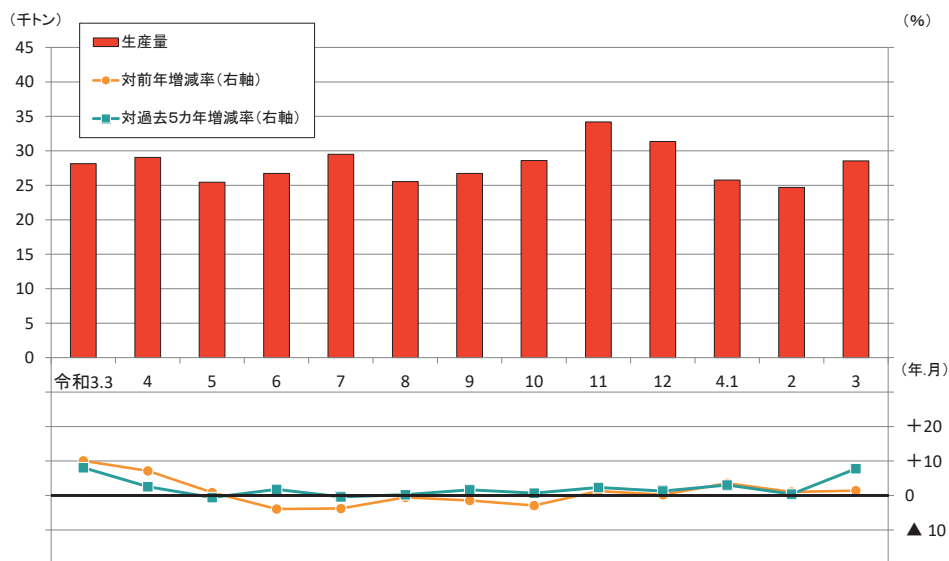
4年3月の牛肉生産量、前年同月比1.4%増

1 令和4年3月の牛肉生産量は、2万8541トン（前年同月比1.4%増）と前年同月をわずかに上回った（図1）。品種別では、和牛は1万3121トン（同0.7%減）と前年同月をわずかに下回った一方、交雑種は7263トン（同6.4%増）と前年同月

をかなりの程度上回った。また、乳用種は7672トン（同0.0%減）と前年同月並みとなった。

なお、過去5カ年の3月の平均生産量との比較では、7.8%増とかなりの程度上回る結果となった。

図1 牛肉生産量の推移



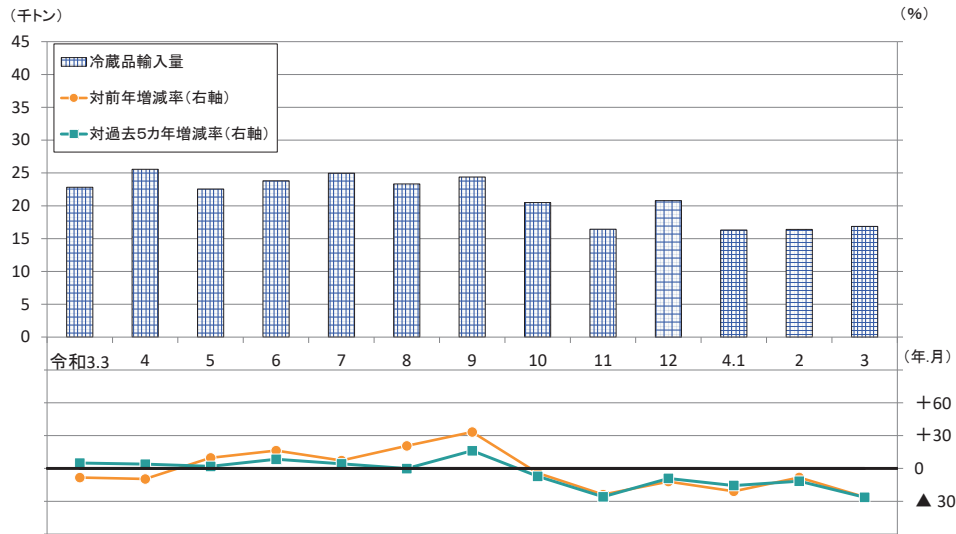
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2 3月の輸入量は、米国産および豪州産の輸入量が現地価格の高止まりや入船遅れなどにより減少したことから、冷蔵品は1万6860トン（同26.2%減）、冷凍品は1万7016トン（同27.1%減）と、ともに前年同月を大幅に下回った（図2、図3）。

この結果、全体でも3万3911トン（同26.6%減）と前年同月を大幅に下回った。

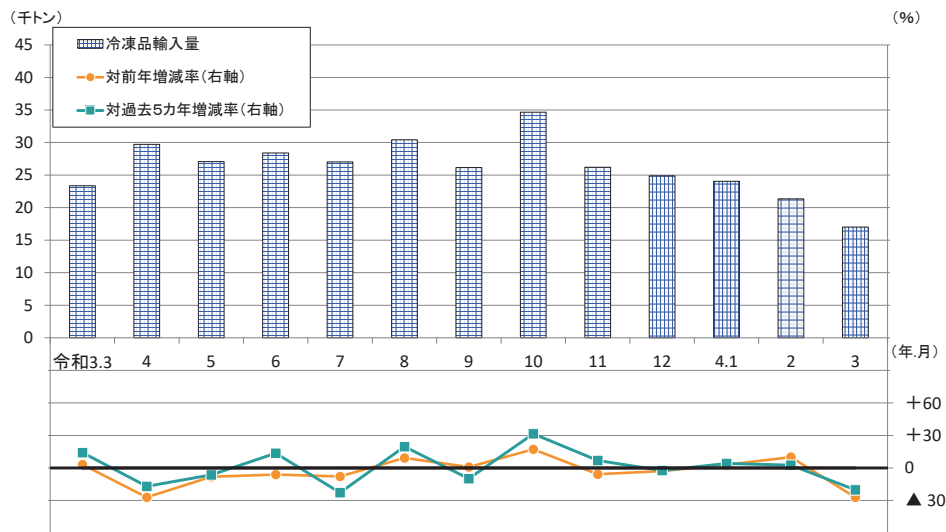
なお、過去5カ年の3月の平均輸入量との比較でも、冷蔵品は26.4%減、冷凍品は20.2%減と、ともに大幅に下回る結果となった。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

3 3月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）は182グラム（同2.1%減）と前年同月をわずかに下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の3月の平均消費量との比較でも、2.8%減とわずかに下回る結果となった。

一方、外食産業全体の売上高（同5.9%増）は、気温の上昇とともに人出が増え、

また3月22日以降はまん延防止等重点措置が全国すべての地域で解除となったことから前年同月をやや上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態では、ハンバーガー店を含むファーストフードの洋風は、原材料費高騰による価格改定もあり、同8.9%増と前年同月をかなりの程度上回った。また、

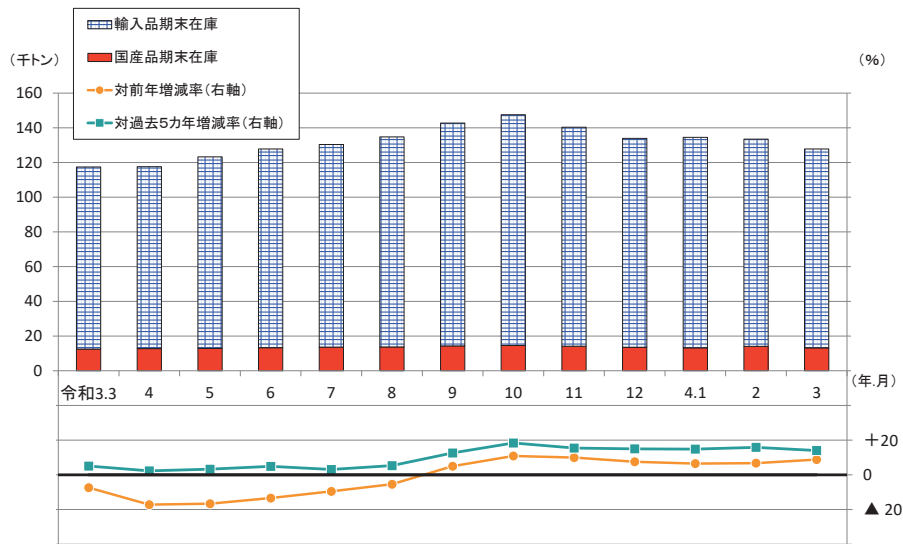
牛丼店を含むファーストフードの和風は、深夜営業の再開で店内飲食が増えたことから、同7.9%増と前年同月をかなりの程度上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、深夜営業ができるようになったことなどから同8.4%増と前年同月をかなりの程度上回った。

4 3月の推定期末在庫は、12万7825トン（同8.8%増）と前年同月をかなりの程

度上回った（図4）。このうち、輸入品は11万4655トン（同9.3%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

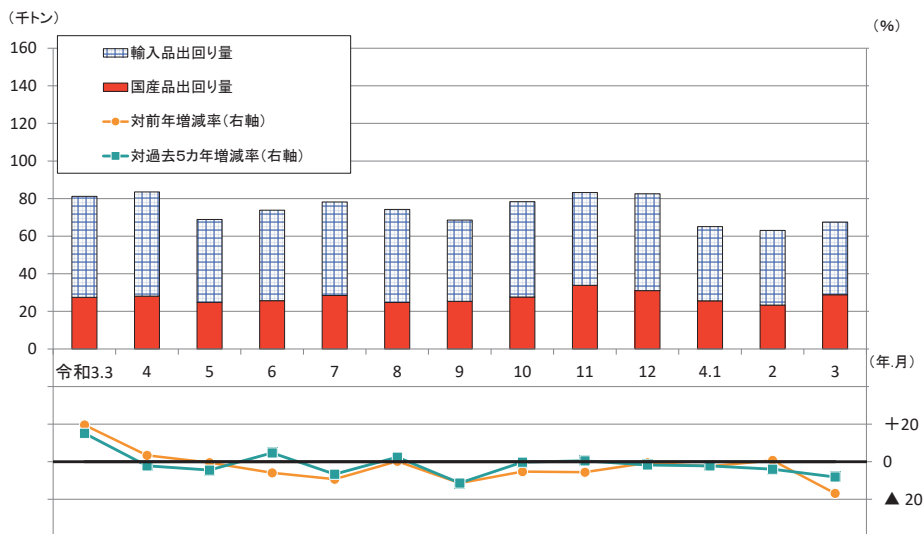
推定出回り量は、6万7524トン（同16.9%減）と前年同月を大幅に下回った（図5）。このうち、国産品は2万8853トン（同5.2%増）と前年同月をやや上回った一方、輸入品は3万8670トン（同28.1%減）と前年同月を大幅に下回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 前田 絵梨)

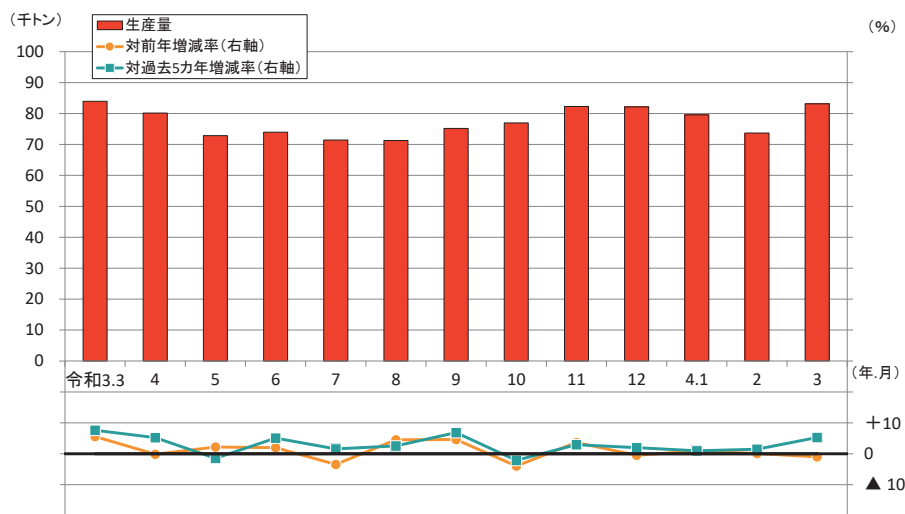
豚 肉

4年3月の豚肉生産量、前年同月比1.0%減

1 令和4年3月の豚肉生産量は、8万3139トン（前年同月比1.0%減）と前年同月をわずかに下回った（図1）。

なお、過去5カ年の3月の平均生産量との比較では、5.3%増とやや上回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



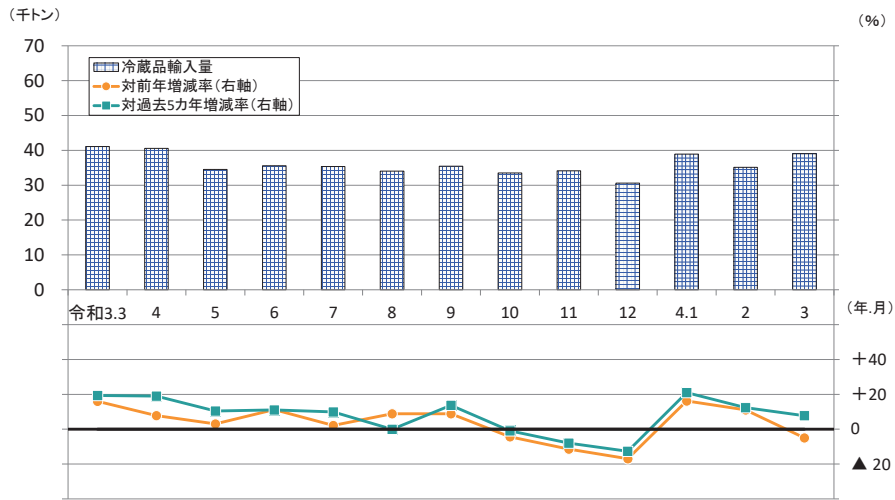
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2 3月の輸入量は、冷蔵品は、前年の輸入量が新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響に伴う北米からの入船遅れにより少なかった一方で、北米の国内需要の増加による現地価格の高騰により、3万9050トン（同5.0%減）と前年同月をやや下回った（図2）。冷凍品は、中国の買い付けが弱まったことにより相場が下がった欧州産の輸入量が増加したことなどが

ら、3万2788トン（同17.7%増）と前年同月を大幅に上回った（図3）。この結果、全体でも7万1838トン（同4.2%増）と前年同月をやや上回った。

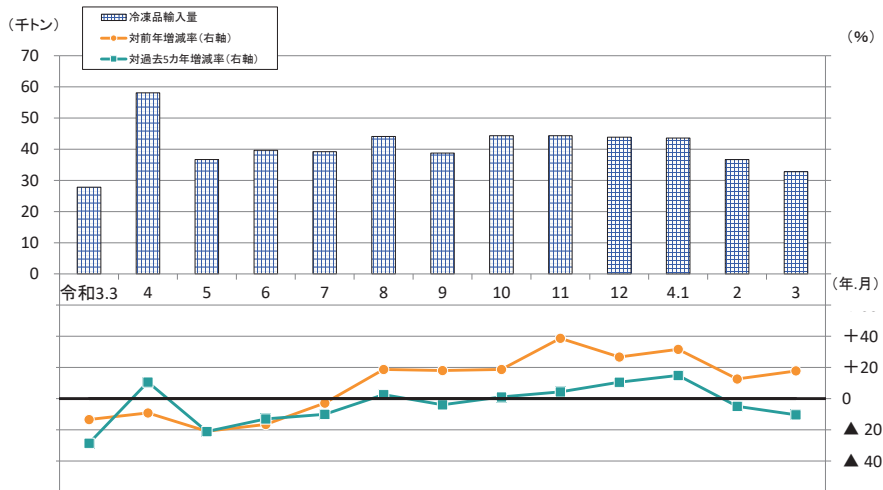
なお、過去5カ年の3月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は7.7%増とかなりの程度上回った一方、冷凍品は10.4%減とかなりの程度下回る結果となった。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

3 3月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）は、661グラム（同2.6%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

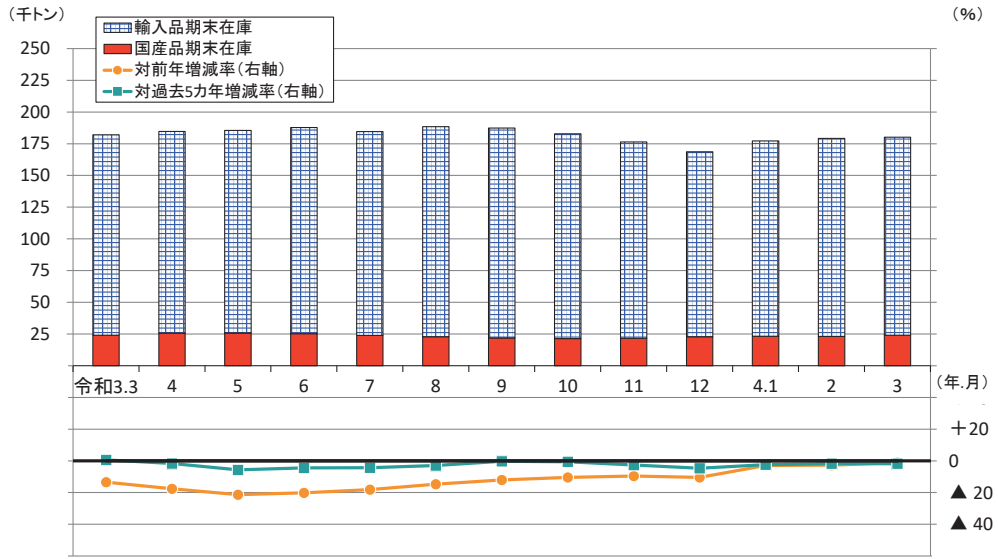
なお、過去5カ年の3月の平均消費量との比較では、4.1%増とやや上回る結果となった。

4 3月の推定期末在庫は、18万95トン（同1.0%減）と前年同月をわずかに下回った。

このうち、輸入品は、15万6094トン（同1.1%減）と前年同月をわずかに下回った（図4）。

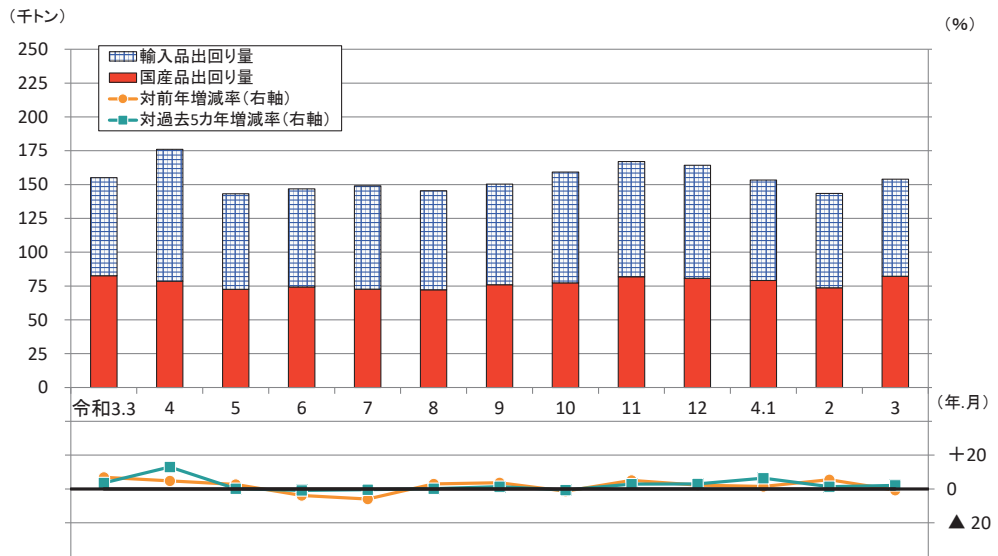
推定出回り量は、15万3969トン（同0.7%減）と前年同月をわずかに下回った（図5）。このうち、国産品は7万1779トン（同1.0%減）、輸入品は8万2191トン（同0.5%減）と、ともに前年同月をわずかに下回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 田中 美宇)

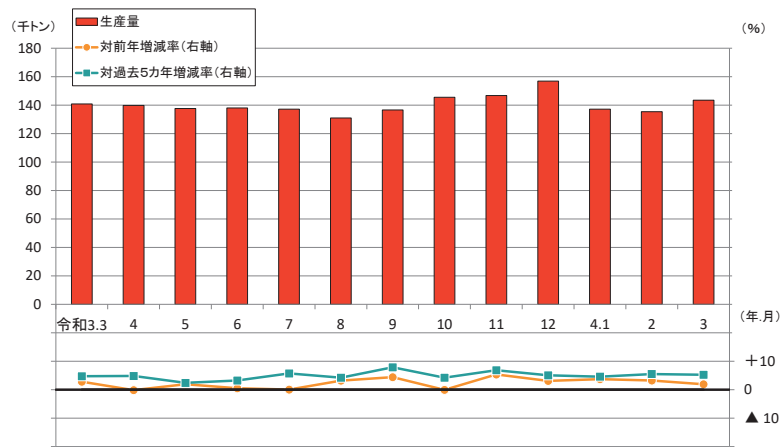
鶏肉

4年3月の鶏肉生産量、前年同月比1.9%増

1 令和4年3月の鶏肉生産量は、好調な需要を背景に、14万3478トン(前年同月比1.9%増)と前年同月をわずかに上回った(図1)。

なお、過去5カ年の3月の平均生産量との比較でも、5.2%増とやや上回る結果となった。

図1 鶏肉生産量の推移

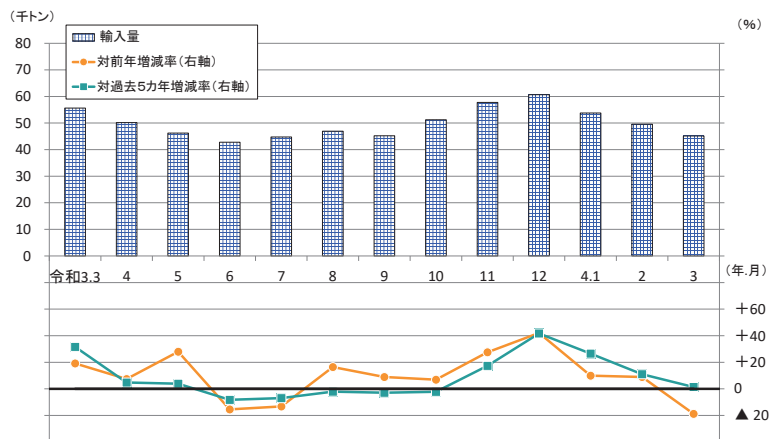


資料：農畜産業振興機構調べ
注1：骨付き肉ベース。
注2：成鶏肉を含む。

2 3月の輸入量は、ブラジル産は前年同月の輸入量が通関繰り延べの影響により多かったことなどにより前年同月の輸入量を下回った。また、タイ産も前年同月の輸入量が多かったことに加え、昨秋以降、タイ国

内におけるCOVID-19の拡大などを背景に前年同月の輸入量を下回った。この結果、全体では4万5135トン(同18.9%減)と前年同月を大幅に下回った(図2)。

図2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

なお、過去5カ年の3月の平均輸入量との比較では、1.4%増とわずかに上回る結果となった。

3 3月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）は、531グラム（同2.1%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

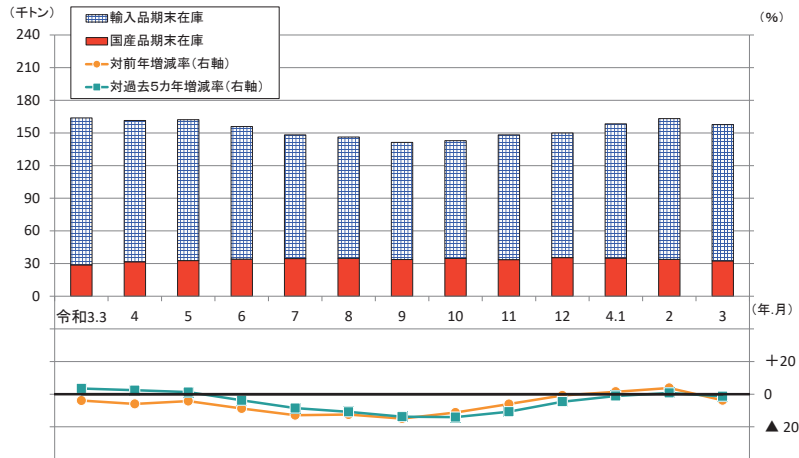
なお、過去5カ年の3月の平均消費量との比較でも、7.7%増とかなりの程度上回る結果となった。

4 3月の推定期末在庫は、15万7653ト

ン（同3.8%減）と前年同月をやや下回った（図3）。このうち、輸入品は12万5160トン（同7.3%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

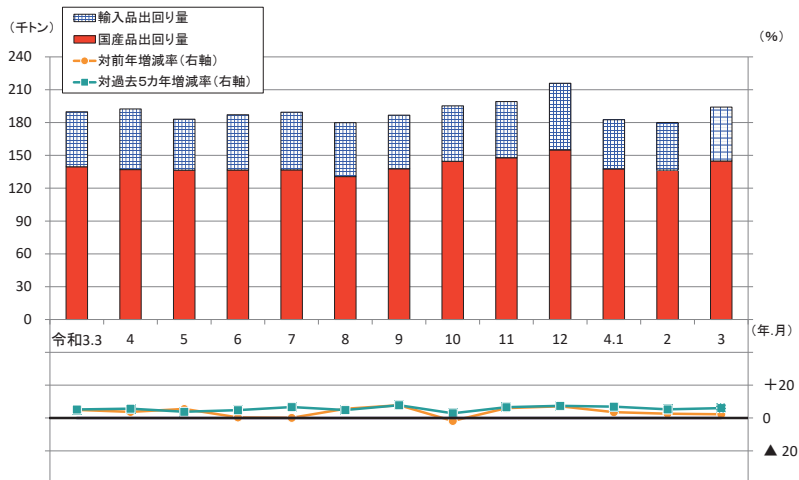
推定出回り量は、19万4134トン（同2.3%増）と前年同月をわずかに上回った（図4）。このうち、国産品は14万4886トン（同3.8%増）と前年同月をやや上回った一方、輸入品は4万9247トン（同2.1%減）と前年同月をわずかに下回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 郡司 紗千代)

令和3年度の食肉の需給動向について

令和3年度(令和3年4月～令和4年3月)の食肉の畜種別の需給動向は以下の通り。

【牛肉】

生産量は、前年度並み

3年度(令和3年度)の牛肉生産量は、33万6115トン(前年度比0.2%増)と前年度並みとなった(表1)。品種別では、和牛は16万611トン(同0.0%増)と前年度並みとなり、交雑種は8万3633トン(同1.8%増)と前年度をわずかに上回ったものの、乳用種は8万6442トン(同1.3%減)と前年度をわずかに下回った。

交雑種は、乳用牛への性判別精液の利用割合が増加傾向にあることに伴い交雑種生産に利用できる乳用牛の確保も進んできたことに加え、種付け時に交雑種の子牛価格が上昇していたことなどにより増加したとみられる。一方、乳用種は、性判別精液の活用や受精卵移植による和子牛の生産拡大などにより減少したとみられる。

輸入量は、冷蔵品・冷凍品ともに前年度を下回る

3年度の牛肉輸入量は、56万9107トン(前年度比3.7%減)と2年連続で減少した。内訳を見ると、主にテーブルミートとして消費される冷蔵品は25万1889トン(同2.4%減)とわずかに、主に加工・業務用に仕向けられる冷凍品は31万6918トン(同4.7%減)とやや、いずれも前年度を下回った。

冷蔵品の主要輸入先を見ると、米国産の全体に占める割合が52%、豪州産が37%とな

り、2カ国で約9割を占めている。米国産は、現地価格が高騰していたものの、前年度の輸入量がCOVID-19の拡大に伴う北米の現地工場の操業停止の影響などから減少していたこともあって、前年度をやや上回る13万540トン(同4.7%増)となった。一方、豪州産は、干ばつ後の牛群再構築のため生産量が減少していたことに伴う現地価格の高騰などから、前年度を大幅に下回る9万2457トン(同16.8%減)となった。

冷凍品の主要輸入先を見ると、豪州産の全体に占める割合が43%、米国産が29%となり、2カ国で7割以上を占めている。豪州産は、冷蔵品と同様の理由により、13万5376トン(同6.3%減)と前年度をかなりの程度下回った。米国産は、現地価格の高騰などから、9万1378トン(同28.6%減)と前年度を大幅に下回った。

推定出回り量は、前年度をやや下回る

3年度の牛肉の推定出回り量は、88万6983トン(前年度比4.7%減)と2年連続で減少した。このうち輸入品は、牛肉消費量の約6割を占める外食消費がCOVID-19の影響により振るわなかったことなどから、55万9383トン(同7.1%減)と前年度をかなりの程度下回った。一方、国産品は、COVID-19の影響による内食需要が維持されたことなどから、32万7600トン(同0.2%減)と前年度並みとなった。

年度末(令和4年3月)の推定期末在庫は12万7825トン(同8.8%増)と前年度末をかなりの程度上回った。このうち、9割を占

める輸入品在庫は11万4655トン（同9.3%増）とかなりの程度、国産品在庫は1万

3170トン（同5.0%増）とやや、いずれも前年度末を上回った。

表1 牛肉需給表

年度	生産量									輸入量					
			うち和牛		うち交雑種		うち乳用種				うち冷蔵品		うち冷凍品		
	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	
H29	329,691	1.7%	145,050	1.8%	86,819	9.7%	93,871	▲4.5%	571,854	8.8%	269,949	12.7%	301,158	5.5%	
30	332,852	1.0%	149,183	2.8%	88,725	2.2%	90,911	▲3.2%	619,686	8.4%	278,741	3.3%	340,422	13.0%	
R1	329,653	▲1.0%	151,964	1.9%	84,179	▲5.1%	89,002	▲2.1%	622,366	0.4%	278,119	▲0.2%	343,623	0.9%	
2	335,556	1.8%	160,564	5.7%	82,160	▲2.4%	87,571	▲1.6%	590,992	▲5.0%	258,136	▲7.2%	332,598	▲3.2%	
3	336,115	0.2%	160,611	0.0%	83,633	1.8%	86,442	▲1.3%	569,107	▲3.7%	251,889	▲2.4%	316,918	▲4.7%	

年度	推定期末在庫						推定出回り量					
			うち輸入品		うち国産品				うち輸入品		うち国産品	
	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)
H29	97,568	▲5.1%	88,070	▲4.3%	9,498	▲11.8%	903,802	5.0%	575,804	6.9%	327,998	1.7%
30	115,940	18.8%	107,206	21.7%	8,734	▲8.0%	930,365	2.9%	600,550	4.3%	329,815	0.6%
R1	126,843	9.4%	116,128	8.3%	10,715	22.7%	936,977	0.7%	613,444	2.1%	323,534	▲1.9%
2	117,475	▲7.4%	104,931	▲9.6%	12,544	17.1%	930,350	▲0.7%	602,189	▲1.8%	328,162	1.4%
3	127,825	8.8%	114,655	9.3%	13,170	5.0%	886,983	▲4.7%	559,383	▲7.1%	327,600	▲0.2%

資料：農林水産省「食肉流通統計」、財務省「貿易統計」、在庫量は（独）農畜産業振興機構調べ

注1：部分肉ベース。

注2：輸入量のうち、冷蔵品および冷凍品には煮沸肉ならびにくず肉のうちほほ肉および頭肉を含まない。

【豚肉】

生産量は、前年度をわずかに上回る

3年度の豚肉生産量は、と畜頭数（前年度比0.4%増）および枝肉重量（同0.3%増）の増加により、92万2666トン（同0.7%増）と前年度をわずかに上回った。なお、と畜頭数および生産量は、ともに4年連続で増加した（表2）。

輸入量は、前年度をやや上回る

3年度の豚肉輸入量は92万8994トン（前年度比5.1%増）と、4年ぶりに90万トンを割り込んだ前年度をやや上回った。内訳をみると、冷蔵品は42万6836トン（同2.1%増）とわずかに、冷凍品は50万2142トン（同7.8%増）とかなりの程度、い

れも前年度を上回った。冷蔵品については、COVID-19の影響により外食需要の一部が内食にシフトしたことが、輸入量の増加につながったものとみられる。また、主に加工・業務用に仕向けられる冷凍品の増加は、前年度の輸入量が、冷凍豚肉の在庫が高い水準にあった中で業務用需要の減少により抑えられたことへの反動とみられる。

冷蔵品の主な輸入先を見ると、米国産の全体に占める割合が49%、カナダ産が45%となり、2カ国で9割以上を占めている。米国産は21万1280トン（同5.3%増）と前年度をやや上回った一方、カナダ産は19万3867トン（同3.4%減）と前年度をやや下回った。

また、冷凍品の主な輸入先を見ると、スペイン産の全体に占める割合が27%、メキシ

コ産が19%、デンマーク産が16%となり、3カ国で6割以上を占めている。スペイン産は13万6222トン（同37.7%増）と大幅に、メキシコ産は9万6941トン（同10.4%増）とかなりの程度、デンマーク産は8万1343トン（同9.5%増）とかなりの程度、いずれも前年度を上回った。

推定出回り量は、前年度をわずかに上回る

3年度の豚肉の推定出回り量は、185万2008トン（前年度比1.3%増）と2年連続で増加した。豚肉消費量の約5割は家計消費

が占めているが、緊急事態宣言などが前年度よりも長期化し、内食需要が堅調に推移したことなどが増加につながったとみられる。内訳をみると国産品は92万1228トン（同0.6%増）と、輸入品は93万780トン（同2.2%増）と、ともに前年度をわずかに上回った。

年度末（令和4年3月）の推定期末在庫は18万95トン（同1.0%減）と前年度末をわずかに下回った。このうち、9割近くを占める輸入品在庫は15万6094トン（同1.1%減）と、国産品在庫は2万4001トン（同0.4%減）と、ともに前年度末をわずかに下回った。

表2 豚肉需給表

年度	生産量		輸入量					
	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	うち冷蔵品		うち冷凍品	
					トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)
H29	890,082	▲ 0.5%	925,631	5.5%	398,826	9.6%	526,781	2.7%
30	897,499	0.8%	916,172	▲ 1.0%	405,357	1.6%	510,794	▲ 3.0%
R1	902,925	0.6%	953,112	4.0%	415,663	2.5%	537,419	5.2%
2	916,671	1.5%	883,985	▲ 7.3%	418,240	0.6%	465,703	▲ 13.3%
3	922,666	0.7%	928,994	5.1%	426,836	2.1%	502,142	7.8%

年度	推定期末在庫						推定出回り量					
	うち輸入品		うち国産品		うち輸入品		うち国産品		うち輸入品		うち国産品	
	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)	トン	前年度比 (増減率)
H29	180,974	1.9%	160,500	▲ 0.7%	20,474	29.2%	1,811,633	2.8%	926,800	6.7%	884,833	▲ 1.0%
30	166,489	▲ 8.0%	145,268	▲ 9.5%	21,221	3.6%	1,827,470	0.9%	931,404	0.5%	896,065	1.3%
R1	210,137	26.2%	185,075	27.4%	25,062	18.1%	1,811,555	▲ 0.9%	913,305	▲ 1.9%	898,251	0.2%
2	181,984	▲ 13.4%	157,880	▲ 14.7%	24,104	▲ 3.8%	1,827,351	0.9%	911,180	▲ 0.2%	916,171	2.0%
3	180,095	▲ 1.0%	156,094	▲ 1.1%	24,001	▲ 0.4%	1,852,008	1.3%	930,780	2.2%	921,228	0.6%

資料：農林水産省「食肉流通統計」、財務省「貿易統計」、在庫量は（独）農畜産業振興機構調べ

注1：部分肉ベース。

注2：輸入量のうち、冷蔵品および冷凍品にはくず肉を含まない。

【鶏肉】

生産量は、過去最高を更新

3年度の鶏肉生産量は、168万5351トン（前年度比2.2%増）と前年度をわずかに上回り、過去最高となった（表3）。増加の背景には、近年、消費者の健康志向の高まりなどによる底堅い需要を受け、生産者の増産意欲が高まっていることがあるとみられる。

輸入量は、前年度をかなりの程度上回る

3年度の鶏肉輸入量は、59万4223トン（前年度比7.5%増）と前年度をかなりの程度上回った。国内の輸入品在庫量が減少していたことに加え、中食需要が増加したことが輸入量の増加につながったとみられる。内訳を見ると、冷蔵品はわずか2トンであり、ほぼ冷凍品となっている。

主要輸入先を見ると、ブラジル産の輸入品の全体に占める割合が74%、タイ産が23%となり、2カ国で9割以上を占めている。ブラジル産は44万435トン（同8.8%増）と前年度をかなりの程度上回った。タイ産は、現地におけるCOVID-19の影響により輸入量

が少ない月があったものの、年度全体では13万5335トン（同1.5%増）と前年度をわずかに上回った。

推定出回り量は、過去最高を更新

3年度の鶏肉の推定出回り量は、228万5723トン（前年度比3.5%増）と前年度をやや上回り、過去最高となった。近年、消費者の健康志向などを背景に増加傾向で推移している中、COVID-19の影響により中食需要が堅調だったことなどが増加につながったとみられる。このうち、全体の7割以上を占める国産品は、大半を占める家計消費が好調であったことから168万1638トン（同1.9%増）と前年度をわずかに上回り、11年連続の増加となった。また、主に加工・業務用に利用されている輸入品も60万4085トン（同8.4%増）と前年度をかなりの程度上回った。

年度末（令和4年3月）の推定期末在庫は15万7653トン（同3.8%減）と前年度末をやや下回った。このうち、約8割を占める輸入品在庫は12万5160トン（同7.3%減）と前年度末をかなりの程度下回った一方、国産品在庫は3万2493トン（同12.9%増）と前年度末をかなり大きく上回った。

表3 鶏肉需給表

年度	生産量		輸入量		推定期末在庫						推定出回り量					
							うち輸入品		うち国産品				うち輸入品		うち国産品	
	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)	トン	前年度比(増減率)
H29	1,588,158	2.8%	593,037	12.8%	176,552	30.0%	148,123	31.5%	28,429	23.2%	2,140,402	2.3%	557,589	2.1%	1,582,813	2.4%
30	1,599,823	0.7%	544,923	▲8.1%	152,329	▲13.7%	124,677	▲15.8%	27,652	▲2.7%	2,168,969	1.3%	568,369	1.9%	1,600,600	1.1%
R1	1,646,774	2.9%	572,118	5.0%	170,447	11.9%	139,326	11.7%	31,121	12.5%	2,200,774	1.5%	557,469	▲1.9%	1,643,305	2.7%
2	1,648,625	0.1%	552,832	▲3.4%	163,802	▲3.9%	135,022	▲3.1%	28,780	▲7.5%	2,208,102	0.3%	557,136	▲0.1%	1,650,966	0.5%
3	1,685,351	2.2%	594,223	7.5%	157,653	▲3.8%	125,160	▲7.3%	32,493	12.9%	2,285,723	3.5%	604,085	8.4%	1,681,638	1.9%

資料：財務省「貿易統計」、(独)農畜産業振興機構調べ

注1：生産量は骨付き肉ベース。

注2：成鶏肉を含む。

注3：輸入量には鶏肉以外の家きん肉を含まない。

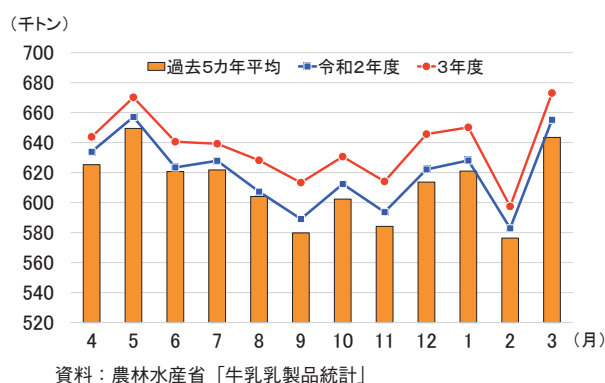
(畜産振興部 前田 絵梨)

牛乳・乳製品

4年3月の生乳生産量、増産基調を継続

令和4年3月の全国の生乳生産量は、67万3100トン（前年同月比2.7%増）と前年同月をわずかに上回った（図1）。地域別に見ると、北海道は37万5506トン（同4.7%増）と前年同月をやや上回り、都府県は29万7594トン（同0.4%増）と前年同月をわずかに上回った。

図1 生乳生産量の推移



3月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは32万7532トン（同0.5%減）と前年同月をわずかに下回った。うち業務用向けは2万9150トン（同3.3%増）と前年同月をやや上回った。

乳製品向けは、34万1805トン（同6.0%増）と前年同月をかなりの程度上回った。品目別に見ると、チーズ向けが4万1679トン（同3.1%増）、脱脂粉乳・バター等向けが19万808トン（同10.9%増）、クリーム向けが6万1623トン（同2.7%減）、脱脂濃縮乳向けが4万4895トン（同0.7%減）となり、脱脂粉乳・バター等向けがかなりの程度上回った（農林水産省「牛乳乳製品統計」、農畜

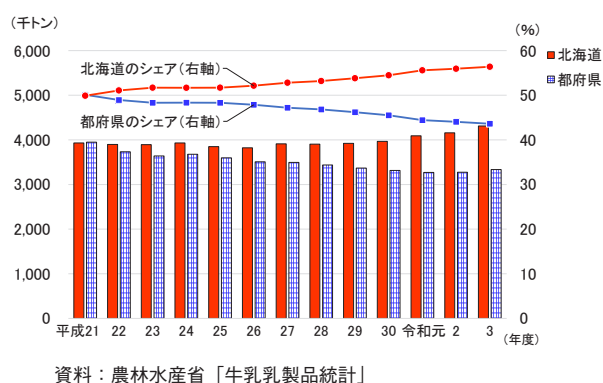
産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

令和3年度の生乳生産量、昨年度に引き続き増産

令和3年度の生乳生産量は、764万6519トン（前年度比2.9%増）と前年度をわずかに上回った。地域別に見ると、北海道は431万1496トン（同3.7%増）と5年連続で前年度を上回った。都府県は333万5023トン（同1.8%増）と、3年連続で前年度を上回った（図2）。

なお、全国の生乳生産量に占める北海道のシェアは56.4%、都府県は43.6%となった。北海道が都府県を上回った平成22年度以降、シェアの差は拡大基調で推移している。

図2 地域別生乳生産量の推移



令和3年度の牛乳生産量、前年度並み

令和3年度の牛乳等生産量は区分別に見ると、業務用は30万1264キロリットル（前年度比7.4%増）、学校給食用は34万6662

キロリットル（同5.7%増）と、いずれも前年度を上回った。一方、全体の8割程度を占める家庭内消費主体の直接飲用が254万8859キロリットル（同1.5%減）とやや減

少した。牛乳全体として見ると319万6785キロリットル（同0.1%増）と前年度並みとなった（表）。

表 牛乳等生産量の推移

（単位：千キロリットル）

年度	牛乳						加工乳・成分調整牛乳		はっ酵乳			
	うち業務用		うち学校給食用		うち直接飲用			前年度比 (増減率)		前年度比 (増減率)		
		前年度比 (増減率)		前年度比 (増減率)		前年度比 (増減率)						
令和元	3,159	0.1%	317	▲2.6%	329	▲7.5%	2,513	1.6%	410	▲0.7%	1,033	▲2.8%
2	3,195	1.2%	281	▲11.4%	328	▲0.5%	2,587	2.9%	389	▲5.1%	1,053	1.9%
3	3,197	0.1%	301	7.4%	347	5.7%	2,549	▲1.5%	382	▲1.6%	1,025	▲2.7%

資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

注1：小数第1位以下は、四捨五入。

注2：直接飲用牛乳生産量は、牛乳生産量全体から業務用と学校給食用を除いた数量であり、機構にて算出。

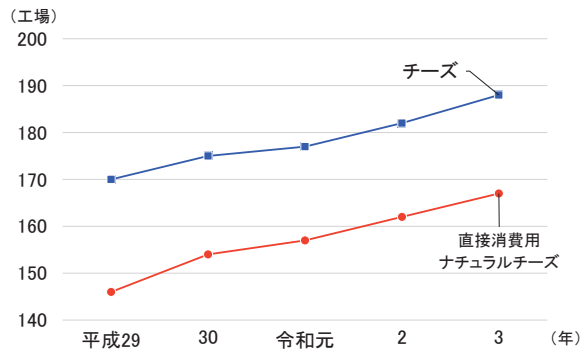
令和3年も前年に引き続きチーズの製造工場数が伸びる

農林水産省が令和4年3月31日に公表した「牛乳乳製品統計調査結果（令和3年基礎調査）」によると、3年12月31日現在の牛乳処理場および乳製品工場は、546工場（対前年13工場減）となった。区分別に見ると、生乳を処理した工場のうち、牛乳処理場は351工場（同10工場減）、乳製品工場は143工場（同5工場増）となった。

また、これを製品の種類別に見ると、飲用牛乳等の製造工場は349工場（同9工場減）と4年連続で減少する中で、乳製品製造工場は327工場と前年と同数となっている。乳製品製造工場のうち、チーズ製造工場は188工場（同6工場増）と前年を上回った（図3）。

内訳を見ると直接消費用ナチュラルチーズの製造工場が、167工場と、前年から5工場増加しており、これは、需要の増加が一因と考えられる。

図3 チーズ製造工場数の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計調査結果（令和3年基礎調査）」

注：各年12月31日時点。

（酪農乳業部 小木曾 貴季）

鶏卵

4年の鶏卵卸売価格、200円台で推移

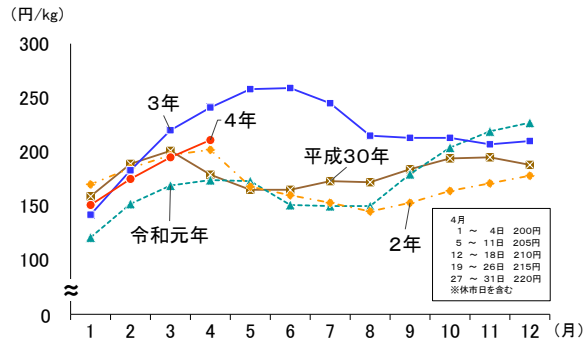
令和4年4月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり211円（前年同月比30円安）と前年同月を下回った（図1）。前年同月の価格が令和2年度シーズンの高病原性鳥インフルエンザ（以下「HPAI」という）の発生による生産量の減少により高い水準で推移していたため、前年同月を下回った。なお、過去5カ年の4月平均との比較では、やや上回る結果となった。

卸売価格は、例年、最需要期の12月に向けて上昇した後、年明けに下落し、春先にかけて再び上昇する傾向がある。4月の同価格は、月初の同200円から段階的に上昇し、月間の上昇幅は20円となった。本年は、2月および3月の採卵鶏の養鶏場におけるHPAIの発生は落ち着いていたものの、4月に入り、北海道などの養鶏場でHPAIが発生したことなどによる生産量の減少や3月のまん延防止等重点措置の解除による需要の回復を受けて、同価格が上昇したものとみられる。

今後について、供給面は、HPAI発生に伴う殺処分の影響などにより抑えられた生産量は回復に向かうとみられる。また、鶏卵の生産動向の指標となる採卵用めすひな餌付け羽数の動向を見ると、3年9月以降、4年1月を除いて前年を上回って推移している（図2）。餌付けされたひなが産卵を開始する約5カ月後から少しずつ生産量に影響が始めるとされていることから、生産量は前年を上回って推移することが見込まれる。

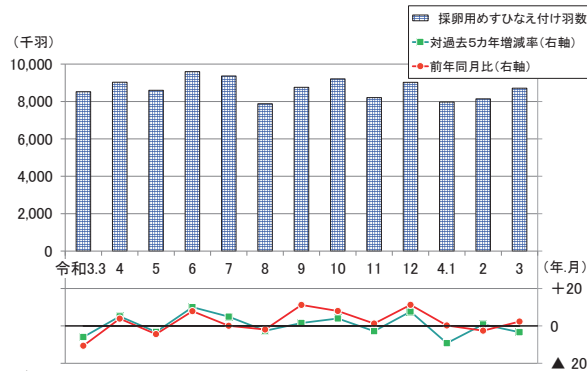
需要面では、例年の傾向として梅雨や気温の上昇による食欲減退からテーブルエッグの消費量が減少が見込まれる一方、まん延防止等重点措置の解除などにより、業務向けや外食向けでは緩やかな回復が続くとみられる。しかしながら、食品価格の相次ぐ値上げを背景とした消費者意識の変化が、今後の鶏卵需要にどのように影響していくのかを注視していく必要があると思われる。

図1 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

図2 採卵用めすひなえ付け羽数の推移



資料：一般社団法人日本種鶏孵卵協会「採卵用ひな飼付羽数」

表1 高病原性鳥インフルエンザ発生状況（採卵鶏）

鳥インフルエンザの発生状況

農林水産省によると、令和3年11月10日以降、HPAIの発生が確認され、発生農場では飼養家さんの殺処分や移動制限などの防疫措置が実施された。このうち、養鶏場（採卵鶏）での発生については、4年5月14日現在、計7道県12事例が確認されている（表1）。

なお、農林水産省の畜産統計（令和3年2月1日現在）では、北海道の採卵鶏飼養羽数が665万2000羽となっていることから、4月に白老町で殺処分対象となった約52万羽は、北海道の採卵鶏飼養羽数の約8%に相当する。

地域	類似患畜判定日	羽数(万羽)	亜型
秋田県横手市	2021/11/10	約14.3	H5N8
鹿児島県出水市	11/13	約3.8	H5N 1
鹿児島県出水市	11/15	約1.1	H5N8
兵庫県姫路市	11/17	約15.5	H5N 1
埼玉県美里町	12/7	約1.7	H5N 1
広島県福山市	12/7	約3.0	H5N 1
愛媛県西条市	12/31	約13	H5N 1
愛媛県西条市	2022/1/4	約8.3	H5N 1
愛媛県西条市など	1/4	約14.8	H5N 1
北海道白老町	4/16	約52	H5N 1
北海道網走町	4/16	約0.01	H5N 1
秋田県大仙市	4/19	約0.04	H5N 1

資料：農林水産省「国内における高病原性鳥インフルエンザ発生状況」

令和2年の市町村別鶏卵産出額、出水市が100億円を超える

令和4年3月29日に農林水産省が「令和2年市町村別農業産出額（推計）^(注1)」を公表した。令和2年の鶏卵産出額の上位市町村^(注2)を見ると、1位の鹿児島県出水市は101億3000万円（前年比3.9%増）と前年から3億8000万円増加し、出水市の鶏卵産出額としては初めて100億円を超えた（表2）。2位の新潟県村上市は87億6000万円（同7.9%増）と前年から6億4000万円増加し、上位市町村の中で最も産出額の伸びが大きかった。次いで、香川県三豊市は79億9000万円（同4.2%増）と、2年11月および12月に高病原性鳥インフルエンザ発生の影響を受けた期間があったものの、年計とし

ては前年を上回った。続く静岡県富士宮市は77億6000万円（同1.5%減）、鹿児島県南九州市は77億6000万円（同3.9%増）となった。

また、令和2年の都道府県別の鶏卵産出額において1位の茨城県では、7位の坂東市は72億円（前年比0.1%減）、8位の小美玉市は69億9000万円（同0.1%減）に達し、これらをはじめ、かすみがうら市（17位）、や石岡市（18位）など産出額の大きい市町村が並んでいる。

（注1）市町村別推計は、生産農業所得統計（都道府県別推計）の都道府県別農業産出額を、農林業センサスの畜種別飼養羽数を用いて按分したものである。そのため、市町村毎の価格の差は反映されていない。

（注2）個人又は法人その他の団体に関する秘密を保護するため、統計数値が非公表で順位の確認が不明なものについては、ハイフン（—）としている。

表2 令和2年上位市町村の鶏卵産出額

位	市町村	産出額 (千万円)	前年比 (増減率)	過去の順位	
				令和元年	平成30年
1	出水市（鹿児島県）	1,013	3.9%	1	5
2	村上市（新潟県）	876	7.9%	2	9
3	三豊市（香川県）	799	4.2%	4	6
4	南九州市（鹿児島県）	776	3.9%	5	2
5	富士宮市（静岡県）	776	▲1.5%	3	4
6	庄原市（広島県）	757	6.2%	7	3
7	坂東市（茨城県）	720	▲0.1%	6	10
8	小美玉市（茨城県）	699	▲0.1%	8	1
9	八戸市（青森県）	698	0.4%	9	8
10	那須塩原市（栃木県）	675	▲1.5%	10	—
参考	全国計	35,315	0.3%	—	—

資料：農林水産省「市町村別農業産出額」

（畜産振興部 郡司 紗千代）